

霰
の
窓

「霞の窓」といふ題は編者のつけたものである。雑記帳のあらこち
に書きつけてあつたのを纏めたもので、「孤囚漫筆」の最初にある
「碧雲暗雲」の續きと云つてもいいものである。

— 編 者 —

大正十五年五月

地響きて運動場の足踏みの聞えつ窓を燕と
ぶなり

太陽の光り波だて乙鳥の歌ふ朝なり床板を
拭く

心いま眼覺めの窓の燕の聲を抱きて機嫌鳴
くなり

燕の尾振り首振り歌ふとき黙る雀の淋しく
もあるか

六 月

憶亡友(二首)

梅雨寒く爪を切りつゝ憶ひ出でぬ囚屋に逝
きし友とありし日

土色の爪を手にぎり年々の梅雨は病臥す男
なりしか

朝空の雲の邊りを旅鳥の三つ飛び行くが遙
かに淋し

かゝる朝は青き松葉のはらくと旅行く人
の心にぞ散れ

夕闇に蚊の聲澄めば小穴よりぼとんと落つ
る塵紙二枚

七 月

水桶の垢落さばやくろくもを覗く白雲朝燒
けて見ゆ

うまひせしあさけ心を大空に舞ひ飛ぶ鳩は
見れど飽かなく

炎天を流る油の一と滴たれてや光るかたば
みの花

かたばみの花酔ひにけり拽々と營む蟻の汗
の光りに

八 月

軒高くあきつの羽根の飴色に濡れて輝く夕
となりぬ

十 月

音信のなども遅き菜畑に今日はしぐれの
水の溜りつ

日毎ふる霰に冬を覺えども夜半すむ月は秋
にぞありける

十一月

遠つ海鳴るときゝあえず多荒の怒り男の風
吹き襲ひけり

厚壁に怒濤とくだく多荒の風きき居れば才
湧きくも

冬の夜の三ヶ月奇しく冴えにけり切られお
富の芝居戀しく

山茶花の戀しくもあれなひも足袋の赤きを
穿けば窓に日の影

雪寒むき廊下を急ぐ喜びのあの足音は湯あ
みならむか

雪暗き廊下の果のセメントの湯槽三尺我れ
獨り浴む

昭和二年一月

みぞれつゝお婆鵬のたゞ一つ啼き渡りけり
佗しと思ふに

霜やけの油塗る手にうすこがね冬の日ざし
のもれそゝぐなる

霜やけの油い塗りて愛しさの手ゆびを撫づ
る愛しき手ゆび

乾燥を乞ひし布團にくるまれば枯木のけむ
る匂ひこもれり

吾が心沈むな病むな雪水のにじみて暗き壁
ぐま見るな

吹き込みし雪の降りて床板に有明の灯のう
つろひにけり

この男からだ懶くけだものの如くに耳はす
るどくなりけり

日のみ神温ためたまへこの男まなこ冷めた
く耳尖りたり

やすらかな軒の雀の寢息をば心にきゝつ寢
なと思へども

入定のまなざしに肖て雪凍る窓の硝子を日
影透れり

雪凍る硝子戸の外の明るみも閉かなるらし
雀啼き居り

窓のそと雪掻く人の聲にだに孤獨の胸は血
しほおどらゆ

分折の爪よ動くなあたゝかく觸れくるもの
を搔くなこわすな

二月

獄死せし我が子の屍掘りいでて母はかい抱
き泣きしとか吹雪
窓硝子凍れる息の繪模様は我が妄想のおど
る姿か

息凍る窓の硝子の繪模様のいづちけゆきし
日影笑へる

橿馬車の箱にくゞりみちのくの雪の秋田
を馳せ曳かれ行く

雪を蹴るそり馬車にしてシベリアの流刑人
をふと思ひけり

この國の子等は可愛し雪まみれ遊べる頬の
くれないの色

紅の美頬の乙女は新藥の雪沓はきて笑まひ
立てるも

藥沓の丹頬の乙女よゴム靴はつめたたくわる
しとばに穿きそね

裏日本寂しき町の雪中に血にまみれたる魚
ひさぐ見ゆ

三 月

亡父を思ふ(四首)

やるせなき情けの涙世の義理の淨瑠璃語る
父なりしかな

祖母さまへ父が手向けの御詠歌の淨瑠璃ぶ
しを母と笑ひし

佛飯を與ふ雀にしたしみのもの言ひ給ふ父
なりしかな

十三の文珠譜りに西京の嵯峨野の花を父と
見てしか

曙の紫深き中よりもあらはれいづるよべの
淡雪

高く舞ひて眼するどき鳶よりも庭の雀の親
しくなりけり

孤り舞へる鳶の眼のわけしさを泪に戀ひし
我れなりしかど

四 月

雨ゆるき窓見てあればまぼろしの芹生の沼
のふと匂ひけり

教誨の座に出づる我が姿を

よりたまる着物の裾の綿の球足に蹴りつゝ
行くがおかしも

黄に霞む春の月影残りけり含み聲なる寢起
き雀に

時ありて雀にまじりちろちろと寂しく啼く
は何鳥ならむ

さみしらに啼ける鳥かもあまつ空たゞよふ
春の光あみつ

松の芽の白く正しく生ひいでてしみらなる
葉を今日しぬぎけり

五
月

いや待ちし乙鳥來にけり獨り居のわが窓ぬ
ちを覗きくれけり

轉れる乙鳥の羽根のゆれゆるゝ紫紺の色は
美しきかな

たまきはる命は聲に轉ひ出で歌へる乙鳥う
らやましもよ

幽々と鳶吹き鳴らす笛の音に乳白雲のあま
ながるかも

春光に泛きたゞよへる白雲のしづしづしづ
と流る寂しさ

うごかねば動けばさみし白雲の色にも春は
深まさりけれ

みちのくの春の鳶笛のどかなり夷蝦が謡は
いまありやなしや

雀どち灯をともしさずやゆく春の宵の庭なる
ろうそく草に

青塗りのたん壺立てる庭みれば瘦せしつづ
ちに花三つあり

日出を戀ふる歌 (三首)
青波のよせうつ國に生れたる身にしあれば
か日の出戀しも

あくがれぬ男鹿師の荒浪にこがねうつろひ
あまのぼる旭を

いのちあらば男鹿師の荒浪にうつろひのぼ
る朝日拜まむ

七日目に病床をあげて
めもたゆにすぎゆく春を眺めつゝわれ病み
てけりそれのなく日を

いづちより訪ひけむ風ぞ病起のあしたうれ
しく匂ふ若葉は

運動場にて (二首)

初夏の空鳴り渡る飛行機を仰ぐも憂しや病
み疲れたれば

飛行機は雲に没しぬ毘沙門の若葉しづかに
風渡りけり

六
月

路中にほつねむとしてひとものべんべん
草の咲き立てるかも

毘沙門の宮の青葉の上に見る白雲の空さら
に静けし

片照れる青葉のほとりさやけしと鳥啼きわ
たるいゆきかへらひ

休み日の未明に覺めておち方の杜にい鳴け
るふゝどりをきく

ふゝ鳴いてけさ露深いねがては三日月赤
く拜みたりける

我が手桶み山清水の満ちなばと想ひつ歌ぐ
ふゝどりの音に

郭公と鳴く鳥きけば樹々青む頃の淋しさ
ちに知らるも

眞夜中にふと眼のさめてなにげなく顔を撫
づれば脂泛けるも

しぬびつゝ窓を開きてぬばたまのさつきの
闇に眺め入りけり

夜の雲の下りてや流るぬばたまのさつきの
眞闇濡れて動くも

運動場にて(六首)

三四本こぼれて生えしあぶら菜の花の盛り
に會ひにけるかも

思はざる此の樂しみに遇ふものかふゝ鳥の
聲あぶら菜の花

薄墨のまだらはあれどこれやこの今年初め
て見つる黄蜂

植えられし躑躅は咲かてこぼれ生ゆ玉菜の
花にあふが尊さ

あぶら菜の花のほかなる庭草をかきかぞふ
れば五いろの花

あぶら菜の花より出でゝ六月の空のもなか
へ消えてゆく蜂

くわつこうと鳴く鳥の音に白みけりけふの
一日も静かに消えなむ

いづくより渡り來にけむ郭公鳥心やすくば
いつまでも居よ

みちのくのひとやの窓に鳴どりをきくがた
ぬしも木綿織りがてに

夏の露深く閉ぢけり木綿織れば藍の香りの
濡れてたゆたふ

郭公鳥いなける杜は木立さび青葉深しとき
きつれぬばゆ

窓日影あから淋しもおちかたの庭の青桐か
げを見せに來ね

青桐の影戀ひ居れば襪の上を燕のかげのふ
とすぎにけり

天津風か吹きかくふき蒼空に薄雲眞綿ひきのばしけむ

病 臥

梅雨の霪深くこめつゝ薄あかね夕となりぬ目醒てみれば

七 月

かたばみの花咲く砂利もくろがねの窓も早れりけしく開けく

日に焼くる砂利の中なるかたばみの花の光に眼そむけつ

茄子畑につとぬき出でし一穗草あきつは愛でゝ今日もどまれる

雨晴れし雲間に深き秋空へ聲も透れとせきれいの啼く

九 月

秋の風さやけからずやくろがねの窓にも馴れて麦飯の味

麦飯の大塊りを秋風につきこぼつなり眞白木の箸

帯木の邊り小暗くえぞ菊のあたり明るく三日ふる雨

髯刺ると顔に塗らるゝ石鹸のいや臭きかも秋の雨ふる

はぢ割れし知の茄子の腸に泌みて滴たる秋の雨はも

十 月

池の球に身はのせられて極みなき大氣の中を我れ漂へり

十一 月

冬に入る日向の壁に蠅二疋とんぼ三疋ひたと止まれり

木枯に亂れ亂れつ一群の朝の鴉の飛び進むかも

北の海に荒浪たゝせ潮巻き眞砂を捲ける風吹き來る

北の風防ぐ板戸に吹き當りて落ち溜りたるは何處の砂ぞ

北くにの風ときけども暴れ風ときけども今日のためならぬ風

巖なすいかつ獣屋もしかすがにこの暴風に堪えてゆらぐも

十二月

灯もいまは消えはてぬ鐵窓を打つは霰かさ
ざれ石かも
外にでれば塵のからだは一吹きに虚空の果
てにけし吹き飛ばむ
此の風に吹き飛ばされて飛び碎け虚空の果
てに飛び散らむかも

霜けむる天つ避雷の金染めて朝日の光り細
く流るも

花蜂とまがふ大蠅我が部屋に響かひ飛び
よき冬なれば

冬なれど晴れて雲なし我が窓に眞向きたる
日を迎へおろがむ

だぶくと汲みそゝがるゝ一碗の茶の湯に
照れる冬日影かな

あたゝかな冬たまはりぬ遠つ國老ひませる
母も日を浴みませね

雨様の冬の日向にいでまさむ老ひませる母
吾を憶ひまさむ

夢さめてくゝと笑ひぬ獨房の冬の夜深く
ゝと笑ひぬ

冬の夜の風が言ふなりふと覺めし夢の行衛
は知れぬ知れぬと

愚かなる身には夢路のくさぐさのたわいな
きこそ嬉しかりけれ

淋しさの底より湧きし溜なみだやがて冷め
たくなりけるかも

積雪一尺、冬らしくなりぬ

灯の光奇しく明るし雪水は窓のすき間を溢
れ垂りつゝ

女子師範の丸山教頭の講話あり。挿話の中に、近

江聖人中江藤樹と追剝との問答ありしを與ふかく

聞きぬ。(二首)

追剝と中江藤樹の問答をきゝつゝ、膝を突き
合へる人

うつむきて膝つき合へる彼の人等強盜なら
む小さき恥らひ

寒むき夜の標ふがまゝに手標えつ書きにし
文字はおかしくもあるか

裳の裾の垂りて餘るをおのこなる我れ折り
籠へば外へぞ折りつる

讀み終えぬ都の便り手にぎりつともしび消
えし雪荒を聴く

また誰か狂ひゆくろくろがねの窓の吹雪
のひと日ひと日を

